



Q 現行版と大きく変わったところは、どこですか。

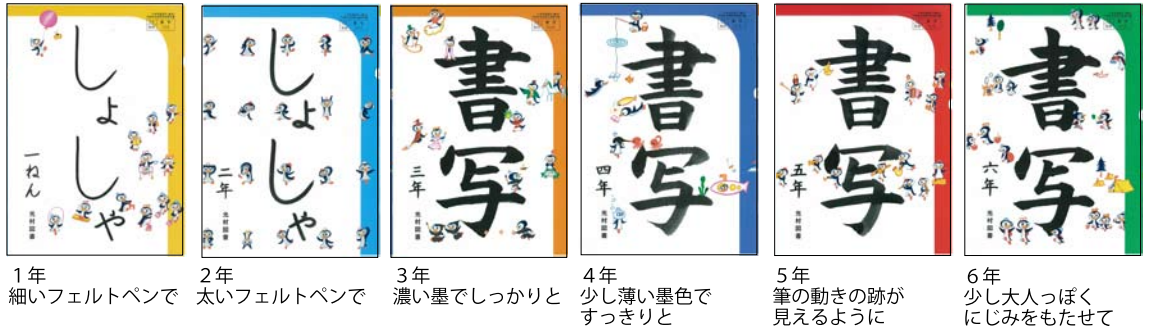
A 子どもたちの意欲を引き出せるよう、書写の基礎・基本を網羅しつつ、写真や図を用いて見やすく分かりやすい紙面を構成しました。また、文字の決まりだけではなく、「どうしてそのような法則が生まれたのか」という理由を示すことで、文字の決まりを暗記するのではなく、思考しながら書くことを大切にしました。

たれの下の部分を少し右にずらして書かないと、たれにぶつかってしまうね。



Q 表紙のタイトル文字が各学年で違うのは、なぜですか。

A 書写は正しく整えて文字を書くことが大切ですが、文字の太さや筆の濃淡、用紙の違いなどによる書き文字ならではの表情を感じ、親しみをもってもらいたいという願いを込めました。



Q 学習指導要領に新しく示された毛筆の特性を、どのように扱っていますか。

A 穂先の向き・穂先の動き (中・高学年)

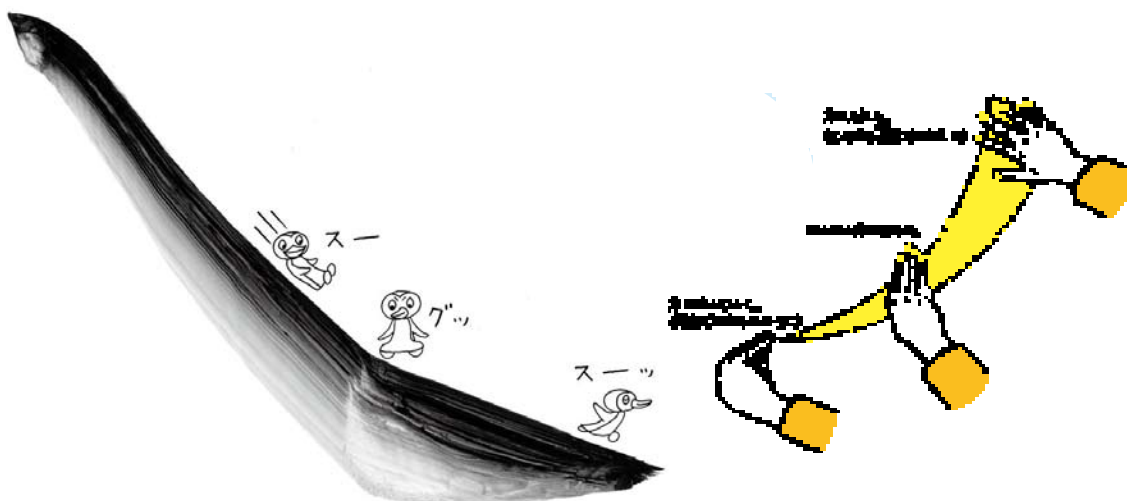
●穂先を濃い墨で示したり、穂先マークで示したりと、穂先の向きや穂先の動きがよく分かるよう工夫しています。



筆圧 (中学年)

●キャラクターの動きと「トン」「スー」「グッ」などの擬音で、筆圧を表現することで、力の加え方のイメージが膨らむように工夫しました。

●手を筆の穂に見立てて空書きすることで、筆圧のイメージを体得するアイデアも取り上げています。



点画のつながり・穂先の動き (高学年)



Q

半紙の枠が紙面に示されていないのは、なぜですか。

示し方を変えることで、目当てが焦点化され、学習の定着を図ることができます。

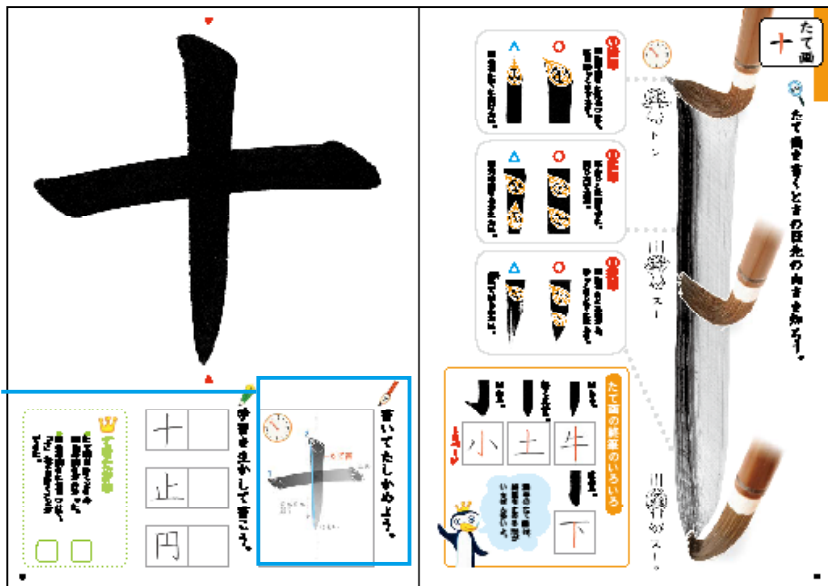


A

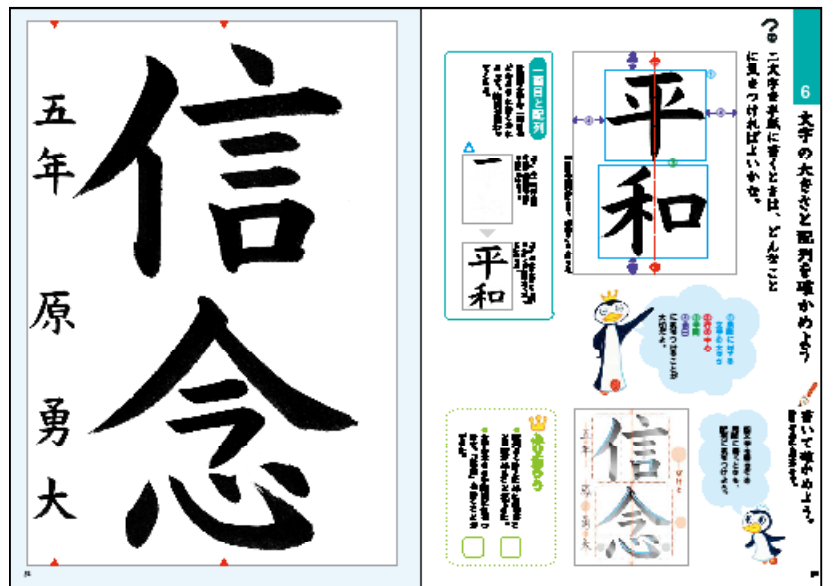
新版教科書では、それぞれの教材での目当てに沿って毛筆大字教材の示し方を変えています。毛筆の筆使いを学ぶ教材では、半紙の中にどう収めるかということよりも、筆使いがよく分かるように、教材文字をできるだけ大きく示しました。一方で、書き初めなどの配列を学習する教材には、用紙に対してどのように文字を配置するかが大切になるので、半紙枠をつけて提示しています。

学習のねらいが、筆使いや字形の習得の場合

学習のねらいが、配列（用紙に対する文字の大きさ・中心・余白など）の場合



(3年 P14-15)



(5年 P30-31)

半紙にどのように書けばよいかという目安は、必ず提示していません。

Q

許容はどのように扱っていますか。

Q

毛筆・硬筆の指導時数は、それぞれどのように設定していますか。

A これまでは……
現行版では、3~6年の各学年で少しずつ提示していました。



新版では

見開きでまとめて提示しました。書く速さに関連させて扱っているため、学習に必然性が生まれます。

A 学習指導要領にある「指導計画の作成と内容の取扱い」では、以下のように記されています。

(2) 硬筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は第3学年以上の各学年で行うこと。また、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、各学年年間30単位時間程度を配当すること。

そこで……

光村の新版教科書の年間指導計画資料では、毛筆を地域や学校の実情に合わせた指導時数で組むことができるよう、配当時数に幅をもたせました。また、各単元の毛筆を使用する書写学習が硬筆の書写能力の基礎となるよう、単元の配列や配当時数に配慮しました。

光村新版教科書配當時数（3～6年）

- 3年：30～35時数（毛筆25～30時数／硬筆5時数）
- 4年：30～35時数（毛筆24～30時数／硬筆5～6時数）
- 5年：30～35時数（毛筆24～30時数／硬筆5～6時数）
- 6年：30～35時数（毛筆24～30時数／硬筆5～6時数）



(6年 P12-13)